

上原良司と特攻隊

改訂版



安島 太佳由 企画作品

はじめに

私と上原良司との出会いは、2004年に特攻をテーマに開催した写真展の会場で、良司の妹・登志江さんから『あゝ祖国よ恋人よ』（長女の清子さん発行）という一冊の本を頂いたことに始まります。

私はこの本の中で、良司が出撃前夜に書いた「所感」のことを知り衝撃を受けました。この「所感」は、戦没学生の手記を掲載した『きけわだつみのこえ』の冒頭を飾り、その価値や意義、そして一人の若い特攻隊員の心情を推し量るものとして大変貴重なものだったのです。

そして愛読書『クロオチエ』に記された冷子ちゃんへの愛のメッセージの工筆ソードを知り、さらに人間味あふれる良司の魅力に引きつけられていきました。軍国主義の時代にあって、自由主義を貫きとおし戦死した良司は、戦渦のなかにあっても人間味あふれる魅力、固い信念と勇氣、心優しさを持ちつづけた普通の青年でした。

非人間的な戦争、全体主義・権力主義の国家や軍隊のなかで、さまざまな葛藤と闘いながら自らの死と引きかえに私たちに多くのものを遺しました。

良司への関心は、残された遺書や日記から、また自身が語った言動から見えてくる人間性や死生観にまで深まっています。

上原良司という一人の若者が辿った戦争の時代の生き様を通して、特攻隊のこの日本の戦争のことを考えていきたいと思います。

この本は2010年に出版した「上原良司と特攻隊」に加筆・修正した改訂版として皆さまにお届けするものです。



初年兵松本連隊時代の良司



特別操縦見習士官時代の良司

上原良司

1922年（大正11年）9月27日、長野県北安曇郡池田町生まれ
松本中学、慶應義塾大学予科から本科経済学部進学
学徒出陣、陸軍歩兵第150連隊（松本）入営、特別操縦見習士官合格
熊谷陸軍飛行学校相模模教育隊、館林教育隊、知覧第40教育飛行隊、
目達原基地第11錬成飛行隊、第56振武隊



軍医として出征している父親に送るために撮られた五人兄妹の写真



左から 長男・良春、次男・龍男、三男・良司、長女・清子、次女・登志江



次男・龍男（右）と良司

それまで学生に猶予されていた徴兵が1943年9月に解除され、慶應義塾大学に在学中だった良司も徴兵されることになりました。10月21日、明治神宮外苑競技場で行われた「出陣学徒壮行会」に参加した翌日の22日、海軍軍医として従軍していた次男・龍男が、ニュー・ヘブライズ諸島で米軍の攻撃を受けて戦死した知らせを良司は聞きました。それ以降、良司は「兄の仇を討つ」という想いで厳しい軍隊生活、操縦訓練に励みました。

「長兄は陸に、次兄は海に、自分は空にて戦う」とし、優秀なパイロットを目指しますが、軍隊生活は生やさしいものではありませんでした。上官の理不尽な制裁や矛盾、そして強制された特攻へと突き進むことになり苦悩の日々を送りました。

次男・龍男の仇討ち



父・寅太郎と母・よ志江

仲の良い兄妹たち

上原家の五人兄妹はとも仲が良かったと言います。そのことを伺い知れるのが上の2枚の写真です。

軍医として出征している父親に励ましのメッセージを送るために撮られたものです。それぞれ手にしたボードには文字が書かれています。

「父サン頑張り」

受け取った父親はさぞかし嬉しかったことでしょう。

左隅の小枝の向きが違っていているのは、演出のために入れられたものだからです。ユニークで微笑ましい写真です。

厳格な父、優しい母親、仲の良い五人兄妹、幸せな家庭を戦争が引き裂いていきました。

長男・良春は陸軍軍医として、次男・龍男は海軍軍医として、三男・良司は陸軍特攻隊員として従軍し三人とも戦死してしまいます。

美しき君が逝きたる天国に

我天独り行かまほしとぞ思う 良司

愛する治子ちゃん(きみ)

良司と治子ちゃんとは幼ない頃から知り合う仲でした。

東京で再会した良司は、朗らかで何の飾り気もない治子ちゃんをひそかに愛しはじめます。会うたびに好きになっていく、その思いは増していきます。

しかし、自分は戦争で死んでいく身で幸せにしてやることなどできない、治子ちゃんの幸せを考えると愛の告白などできないのです。そんなある日、治子ちゃんの結婚相手が決まったことを知りました。

死を覚悟している良司でしたが愛の苦悩の日々が続きました。

良司は愕然とするも現実を受け入れ、治子ちゃんの幸せを祈りました。

結婚後の治子ちゃんは幸せをつかむどころか、結核に冒されわずか21歳でこの世を去ってしまいました。

良司は愛を告白しなかったことを悔みました。

自分自身の死に先駆けた治子ちゃんの死。

この事実を良司はどのように受け止めたのでしょうか。治子ちゃんの死を悼んで次の歌を詠んでいます。

我が胸はつづるばかりなり君が死を
妹の便りに聞きたる今は

良司に治子ちゃんの死を知らせた妹清子さんは、良司が治子ちゃんを愛していたことなど全く気づきませんでした。戦後になってそのことを知り大変驚いたそうです。

良司は自分の死は天国にいる治子ちゃんに会うためであると思うようになります。そして特攻隊員として迫ってくる自分の死も身近なものと感じていきます。

軍国主義に絶望し、愛する人を失った良司が死を前に心の拠り所としたのは何だったのでしょうか。

良司の心情を思うと切なくなってくる。戦争が憎くなってくる。

はかなきは人の命と知りつつも

愛しし人の死は堪えがたし 良司

遺書

父上様並ニ母上様
長い間御苦勞オカセテソノ御恩ニ報シテ出来ズ、私ハ
御許ニ下サイ併ニ直捷國家ニ盡スル間接ニ御両親様ノ御恩
ニ報シテト確信致シ居リヌ、私ハ喜ニテ去ッテ行キマス、
私ハ戦死シト聞カレモ、決テ、歎カナイ下サイ、
私ハ戦死シモ満足ス、何故ナラ、私ハ日本ノ自由ヲメニ戦フタガ
スカラ、
自然ノ氣運ト人ノ間ハ必ス死ス、モデス、
戦死シ私ノ最も親シイ死デス、決テ歎カナイ下サイ、
ソレハ所ノ死デ、ソレノモ所ノ死大切ニ
昭和拾年九月廿二日夜九時

良司

本日、御苦勞オカセテソノ御恩ニ報シテ出来ズ、私ハ
御許ニ下サイ併ニ直捷國家ニ盡スル間接ニ御両親様ノ御恩
ニ報シテト確信致シ居リヌ、私ハ喜ニテ去ッテ行キマス、
私ハ戦死シト聞カレモ、決テ、歎カナイ下サイ、
私ハ戦死シモ満足ス、何故ナラ、私ハ日本ノ自由ヲメニ戦フタガ
スカラ、
自然ノ氣運ト人ノ間ハ必ス死ス、モデス、
戦死シ私ノ最も親シイ死デス、決テ歎カナイ下サイ、
ソレハ所ノ死デ、ソレノモ所ノ死大切ニ
昭和拾年九月廿二日夜九時

学生の徴兵猶予が解除されることが決まった1943年9月22日夜に「クロオチェ」の本の見返しに書かれた遺書。
この時すでに死を覚悟していたようです

愛読書「クロオチェ」

良司はクラシック音楽を聴いたりテニスをしたり、ハイキングに行くような
文化的な家庭環境と、松本中学、慶應義塾大学と自主自立を重んじた教育環
境のもとで育ちました。

とくに慶應義塾時代に軍国主義や全体主義を否定し自由主義を唱えた河合栄
治郎や反ファシズムの旗手であったイタリアの哲学者クローチエの書物との
出会いによって自由主義の思想へと傾倒していきました。

とくに「クロオチェ」(羽仁五郎著)は良司の愛読書となり強い影響を与え
たようです。

その遺本には見返しに書かれた遺書、今日ちゃんへの愛のメッセージ、感動
したところに引かれている赤線、そこに書き込まれた文字など良司のあらゆ
る想いが詰め込まれています。

「クロオチェ」の本文中に丸印で書かれた治子ちゃんへの愛のメッセージ。丸
印で囲まれた文字をつなげると「きょうこち」まで読めます。さらに次のペー
ジをめくり続けて読むと「きょうこちゃんさようなら僕はきみがすぎだった」と
と密かなラブレターになっています。

愛のメッセージ

治子ちゃん さようなら
僕はきみが好きだった・・・



○印が書き込まれている遺本「クロオチェ」

一 市民的哲學者

諸君。

パンを求めて、石を與えらる、こんな経験に、諸君はあ○しているだろう。

電氣の○うな激烈な性質をもつたものを、われわれが家庭においてまた職場におい
て、危険なく自由自在につかつて、高度の生活また生産また交通をなす○ことがでさる
のは、ながいあいだの科學者た○、その中にはあのシュタインメッツなどとゆう人も

自由主義者と軍隊の非人間性

良司は身をもってその権威主義、精神主義を尊ぶ非人間性的な軍隊生活の中の実体験で自由＝人間性の尊重がどれだけ大事かを思い知らされ変貌していきます。その変貌の過程は日記に克明に記されています。

例えば、特別操縦見習士官になったとき、「修養反省録」には「悠久の大儀に生きんと志す」「靖国の神となる日は近づく」と死を持って国に殉じる覚悟を示していましたが、3ヶ月後には「恥辱の日」「俺は本日死したり」と消耗品扱いする軍隊生活に矛盾を感じはじめ絶望感を持っています。

ついには「汝宜しく人格者たれ、教育隊に人格者少なきを遺憾とする」「(下の写真)と露骨に上官批判までするようになり、「一部の愚者が我々の自由を奪おうとして軍人精神という矛盾の題目を唱えるたびに何もかも屈せぬ自由の偉大さを更めて感ずる」と全体主義、権力主義を否定し、自由主義の勝利を確信していきます。

そして良司は「私は日本の自由のために戦う、自由・独立のために喜んで自分の命を捧げます」と自分自身の死と引き替えに自由＝人間性の尊重を願ったのです。日本の敗北を確認し自己の死が未来のためにつながる貴重な死であることを自覚していたのです。

日本の軍隊においては人間の本性たる自由を押さえることを修行とすれど・・・軍人精神が入ったと思ひ誇らしく思つ。

およそこれほど愚かなものはない・・・

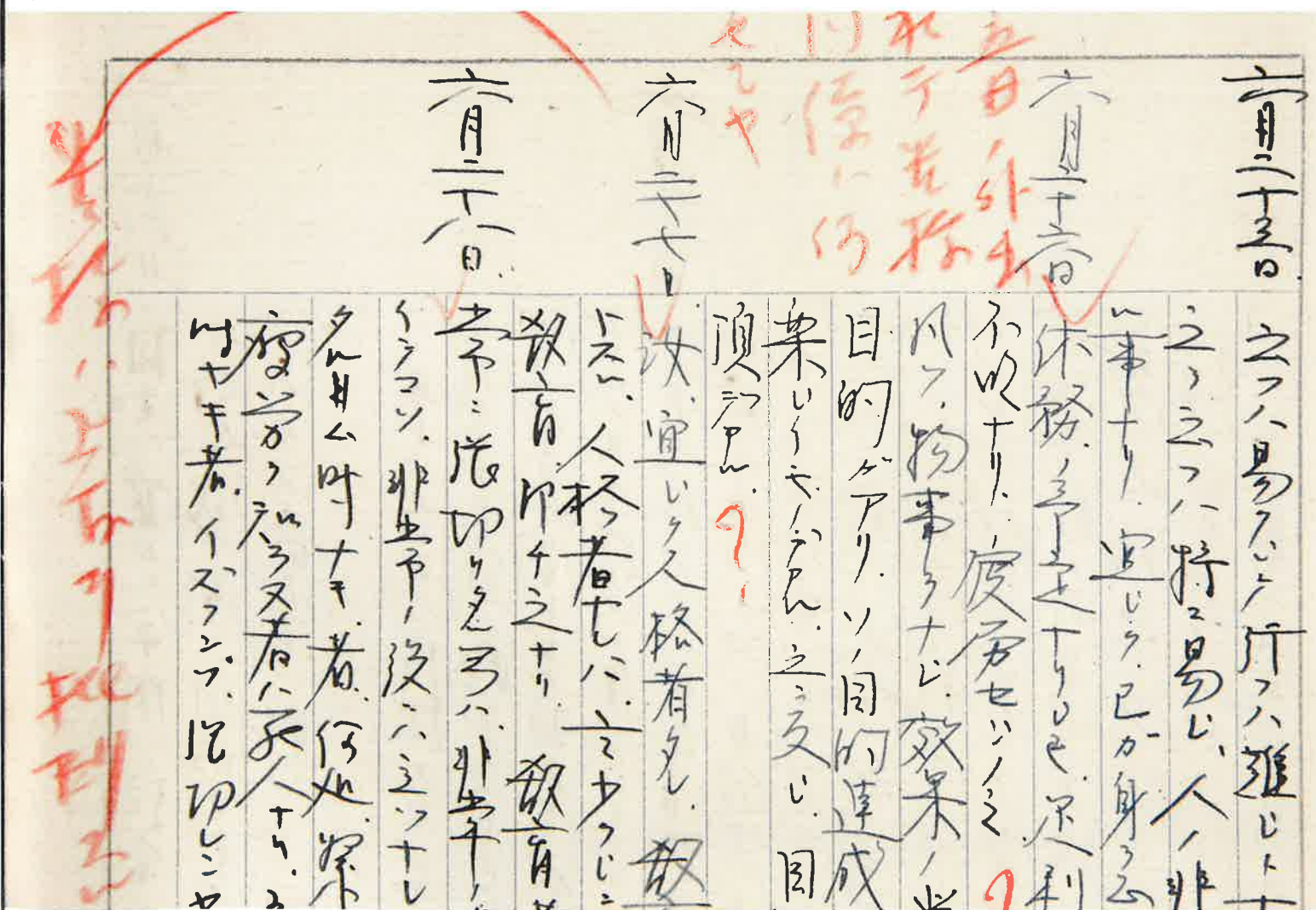
(最後のメモノート)十一月十九日

愛機「飛燕」と共に

第56振武隊の特攻隊員になった良司は、陸軍調布飛行場で愛機となる三式戦闘機「飛燕」を受け取りました。共に特攻作戦で闘う相棒です。その相棒と3枚の記念写真を撮りました。



「修養反省録」に書かれた「汝宜しく人格者たれ」上官批判をする良司、赤文字は「貴様は上官を批判する気か」と上官の返答



特攻隊員(振武隊)になりて

予め期するところ、死所を得たるを喜び。選ばれて今日の栄光を受く。淡々たる気持ちは何の変化なし。勿論、思想上においても変わりなし。生きて尽くすも大した奉公はできぬ。死して日本を守るのだ。

悠久の大義に生きるとか、そんなことはどうでも良い。あくまで日本を愛する。祖国のために独立自由のために闘うのだ。天国における再会、死はその道程にすぎない。愛する日本、そして愛する治子ちゃん。(最後のメモノート)

人の世は別れるものと知りながら
別れはなどでかくも悲しき

辞世



出撃前夜に書かれた「所感」

1945年5月10日夜、最後の夕食が始まる前、兵舎は特攻隊員で一杯、それぞれ持ち物を片付けていました。上原少尉は一人でじっと坐って煙草をふかしていたようです。陸軍報道班員の高木俊朗氏が上原少尉を見つ

け、「出撃する前の気持ちとか考えていることを書いてください」と話しかけ、持っていた原稿用紙をさしました。

上原少尉は「何を書いてもいいですか」と聞き、高木氏は「何でも、本当の気持ちを書いてください」と答えました。上原少尉は黙って書きはじめました。そしてしばらくして高木氏に書き終わった原稿用紙を渡したそうです。それがこの7枚の「所感」です。高木氏は書かれた内容を

を読んで胸を打たれる想いがしたと語っています。

この「所感」を読んで妹の清子さん、登志江さん共に兄の変貌ぶりに驚いたそうです。清子さんは「兄が自由主義思想を持っていたことや、あのような遺書を書いたことに驚き自分の知っている兄からは伺い知れない」と話してくれました。



特攻隊員たちが出撃の日まで寝泊まりした三角兵舎内部（復元）（知覧特攻平和会館）

高木氏は口数が少なく集団の中においても孤独の存在だった上原少尉から「全体主義で戦争に勝つことはできません。日本は負けますよ。私は軍隊でどんなに教育されてもこの考え方を变えることはできません。私は軍隊の中においても自由主義者です」と言う話を聞いてい

ます。「忠君愛国主義に徹した軍隊の中で自由主義を貫くことがどれほど困難であり、ひどい目に遭うか、まさに特攻隊の異色でした」と高木氏は上原少尉を評しています。（高木氏の証言から）

戦後、この「所感」は高木氏から直接上原家へ手渡されました。いま現在も「所感」は上原家で大事に保管されています。

今回の改訂版では、一字一字の文字から上原少尉の思つかいを感じていただきたいと思います、特攻出撃前夜に書かれた「所感」7ページすべての文面を拡大版で紹介いたします。最後に全文を掲載し併せてお読みいただければ幸いです。

No.

五六振武隊 陸軍少尉 上原良司
 本籍 長野縣東筑摩郡和田村一七三
 現住所 長野縣南宇都郡有明村一八六
 出身校 慶應義塾大學經濟學部
 所感
 栄光ある祖國日本の代表的な軍隊と云ふべ
 き陸軍特別攻撃隊に選ばれ身の老成之に過ぐ
 るものふさふさと痛感致して居ります
 思へば長き學工時代を通じて得に信念とも申
 すべき理論力能の道理から考へた場合これに

或は自由主義者と呼ばれ、かも知れず世人が
自由の勝利は明白な事だと思ふ。人々の手
僅に自由を滅す事は絶対に出来なく、例へば
水が柳へうつれて居る如く、たとへば底に於ては
常に開いて、最後には必ず勝つと云ふ小事は彼
のイタリヤのクロイエも云つて居る如く、真
理であると思ふ。す。權力主義全体主義の如
く、~~ハナハ~~一時的に隆盛であらうとも必ずや最後
には敗れ、事ハ明白な事実です。我々ハその真
理を今次世界大戦の枢軸國家に於て見る事が

お来々と思ふ。す。アリスムのイタリヤは如
何ナイズムのドイツ亦既に敗れ、今や權力主義
國家は土台石の壊れた建築物の如く、次は次
へと滅す一つあり。す。真理の普遍さは今現
実に現れて澄み、それより過去に於て歴史が示
した如く、未来永久に自由の偉大さを証明して
行くと思はれ、す。自己の信念のふじかつた事
實の事は或は祖國にとつて思ふべき事であ
るかも知れず、せしむる人にとつては格別の限
りではない。左の如何なる闘争もその根柢を為す

No. 5

室の特攻隊のパイロットは一巻機に選ばれる
友人が云った事は確かです操縦棒を操る
機械人柄もよく感情もよく勿論理性もなく、只敵
の航空母艦に向って吸ひつく砲石の中の鉄の
一分子に選ばれるので素理性を以て考へられ
るに考へられぬ事で強くて考へれば彼等が云
ひ如く自殺者としても云ふまでも精神の自由
な中に在るのみと云ふ事だと思ひます一巻
機であつて人へ何も云ふ権利もありません
唯彼はくは愛する日と偉大なりと云ふれん

No. 6

ものは必ず思ひおりの思ひ次第です既に思ひ
に依つてその闘争の結果を明白に見る事が出来
ると信じます
愛する祖国日本を以て愛する大英帝国の如く
大帝をたゞしめんとす、私の野望は遙かに
くふりまゝに英の目下を愛する者として、
しめたるふりには現在が如き状態にほゞ追
ひ込まれおかつたと思ひます、世界何処に
も肩で風を切つて歩く日本人、これが私の夢
に理想を以てした

No. 7

思ふと死は矢ふにゆく途中で一かありません
 かど何でもありません明日は去る道に
 あり。勿論発表すべき事ばかりでして
 が偽はるぬん境は以上述べた如くです。何も未
 読にて思つた儘之雜然と並べた事を許して
 下さい。明日は自由主義者が一人この世から去
 って行きます。彼の後継者は誰か。いざや彼心中満
 足で一杯です。
 之を以て一書と云ふにたいにけえ、まゝに無礼を
 許す。下さい。で、この辺で

日本映畫社 法人團體 日本映畫社

No. 6

 $50 \times 10 = 500$ 支 每 4 支

社団法人 日本映畫社

「所感」全文

1 栄光ある祖国日本の代表的攻撃隊ともいふべき陸軍特攻隊に選ばれ、身の栄光これに過ぐるものなきと痛感致しております。思えば長き学生時代を通じて得た、信念とも申すべき理論万能の道理から考えた場合、これは

2 あるいは、自由主義者といわれるかも知れませんが、自由の勝利は明白な事だと思えます。人間の本性たる自由を滅す事は絶対に出来なく、例えそれが押さえられているごとく見えても、底においては常に闘いつつ最後には必ず勝つという事は、彼のイタリアのクローチェも言っているごとく真理であると思えます。権力主義、全体主義の国家は一時的に隆盛であろうとも、必ずや最後には敗れる事は明白な事実です。我々はその心理を今次世界大戦の枢軸国家において見る事が

3 出来ると思います。ファシズムのイタリアは如何、ナチズムのドイツまた、既に敗れ、今や権力主義国家は、土台石の壊れた建築物のごとく、次から次へと滅亡しつつあります。真理の普遍さは今、現実によって証明されつつ、過去において歴史が示したごとく、未来永久に自由の偉大さを証明して行くと思われれます。自己の信念の正しかった事、この事はあるいは祖国にとって恐るべき事であるかもしれませんが、吾人にとっては嬉しい限りです。現在のいかなる闘争もその根底を為す

4 ものは必ず思想なりと思う次第です。既に思想によって、その闘争の結果を明白に見る事が出来ると信じます。愛する祖国日本をして、かつての大英帝国のごとき大帝國たらしめんとする私の野望は遂に空しくなりました。真に日本を愛するものをして立たしめたなら、日本は現在のごとき状態にあるいは、追い込まれなかったと思います。世界どこにおいても肩で風を切つて歩く日本人、これが私の夢見た理想でした。

5 空の特攻隊のパイロットは一器械に過ぎぬと一友人が言った事は確かです。操縦桿を採る器械、人格もなく感情もなくもちろん理性もなく、ただ敵の航空母艦に向って吸いつく磁石の中の鉄の分子に過ぎぬのです。理性をもって考えたなら実に考えられぬ事で、強いて言うれば、彼らが言うごとく自殺者とも言いましょうか。精神の国、日本においてのみ見られる事だと思えます。一器械である吾人は何も言う権利ありませんが、ただ願わくば愛する日本を偉大ならしめられん

6 事を、国民の方々にお願いするのみです。こんな精神状態で征ったなら、もちろん死んでも何にもならないかも知れません。故に最初に述べたごとく、特別攻撃隊に選ばれた事を光栄に思っている次第です。飛行機に乗れば器械に過ぎぬのですけれど、いったん下りればやはり人間ですから、そこには感情もあり、熱情も動きます。愛する恋人に死なれた時、自分も一緒に精神的には死んでおりました。天国に待ちある人、天国において彼女と会えると

7 思うと、死は天国に行く途中でしかありません。明日は出撃です。過激にわたり、もちろん発表すべき事ではありませんでしたが、偽らぬ心境は以上述べたごとくです。何も系統だてず思ったままを雑然と並べた事を許して下さい。明日は自由主義者が一人この世から去って行きます。彼の後姿は淋しいですが、心中満足で一杯です。言いたい事を言いただけ言いました。無礼を御許し下さい。ではこの辺で。出撃の前夜記す。



第56振武隊の特攻隊員たちの記念写真、前列中央が上原少尉



出撃前日、早稲田大学の京谷少尉（左）と慶應義塾大の上原少尉

1945年5月11日 午前3時30分 起床
最後の食事 卵・みそ汁・白めし

午前4時 三角兵舎を出て戦闘指揮所へ
見送りの人々に敬礼をしながら歩いていった。

黒木少尉の最後の言葉

「今から出発する、最後に何も言うことはない、
みんな元気でやってくれ」

隊員たちは田陣をつくり手拍子をとって歌った。

「男なら、男なら」

未練残すな 浮世のことに

花は散りぎわ 男は度胸

運と天とは 風まかせ

男なら やって散れ」

歌っていたのは黒木隊の少尉たちだけであった。

午前6時15分 予定の時刻「出発」

午前6時30分 離陸開始

上原少尉は高木氏に飛行機から笑って挨拶した。

陸軍第56振武隊 上原良司少尉

沖縄に向け、特攻出撃

『出撃の朝の楽しい一服は
わがたちちねの賜りしものなり』

母からもらった煙草の最後の一本を吸った。
そして空き箱の裏にこの歌は書かれた。

死後、母親の元にこの空き箱は届けられた。



特攻隊員たちが本土最後の光景として見た開聞岳



上空から見た知覧飛行場跡

特攻出撃の日

1945年5月11日、知覧飛行場を離陸した特攻隊員たちは、地上で見送る人々に上空を2〜3周し翼を振り最後の別れを告げました。隊長機以下編隊を組み針路を南にとり飛び立って行きました。本土最南端・薩摩富士と呼ばれた美しい開聞岳に最後の名残りを惜しみつつ海上に出て一路沖縄の敵艦隊に向けて命をかけた特攻作戦の開始です。

屋久島を過ぎると敵がいつ現れてもおかしくないピケットライン（警戒防衛戦）の空域に入ります。米軍機が上空で待ち構えて特攻機を未然に叩こうとしてやっています。この日特攻機の直掩機（特攻機を護衛し目的地まで送り届け引き返す任務）を操縦した吉原利徳氏の証言では、「敵機グラマン約30機と空戦を行い、特攻機にも被害が出た。誘導地点上空に達し各特攻機は翼を振り、風防を開き手を振って直掩機に引き返すように合図をしている。我々がこれに答えると手やマフラーを振り、拳手の礼をして一路沖縄の敵艦隊を求めて突撃していった」と言います。吉原さんは再び還ることのない特攻隊一機一機に目的達成を祈り永遠の別離を惜しみつつ拳手の答礼をしたそうです。上原機はそこまでは無事に飛行していたようでこれが最後の目撃情報となりました。

私は特攻隊の見た光景がどのようなものであったのかを知りたいと思い、セスナ機をチャーターして特攻隊と同じような飛行ルートを辿ってみたことがあります。もちろん70数年前とは風景も違っているでしょうが、開聞岳や上空からの光景や地形は当時のままです。知覧上空を飛び、わずかに南下すると特徴ある開聞岳が目に入り飛び込めます。特攻隊員たちはこの山をどのような思いで見ているのかと考えるだけで目頭が熱くなってきました。開聞岳に最後の別れをして海上に出ます。私はここで戻りましたが、特攻隊員たちはここからさらに南に向かい、そして最期の瞬間を迎えたのです。

故郷の風景

長野県安曇野は良司が幼少から中学までを過ごした故郷でした。有明山の麓、山に囲まれたのどかな田園風景が広がり近くには乳房川が流れる自然豊かなところでした。

良司はよくこの乳房川で遊びのびのびと自由に育ちました。恵まれた家庭環境の中で家族や友人たちとこの故郷で幸せに暮らしていました。時が過ぎ日本は戦争に突入、いつしか良司もこの故郷に別れを告げなければならない日がやってきます。特攻隊となった良司がこの故郷に最後の別れをするために戻ってきたのが、



有明山が見える風景



良司が幼い頃よく遊んだ乳房川

1945年4月のこと、妹の登志江さんはこの時に良司が「日本は敗れる。俺が戦争で死ぬのは、愛する人達のため。戦死しても天国に行くから靖国神社にはいかないよ」と話すの聞きました。幼なじみの友人には、「死地に赴くの喜んで志願する者は一人だっていない。上官が手をあげざるを得ないような状況をつくっているのだ」と話したと言います。そして故郷を離れる時に「さようなら、さようなら、さようなら」と三度も言って別れを告げたそうです。次に良司が故郷に戻ってきたのは1946年4月26日、無言の帰還でした。



上原 良司

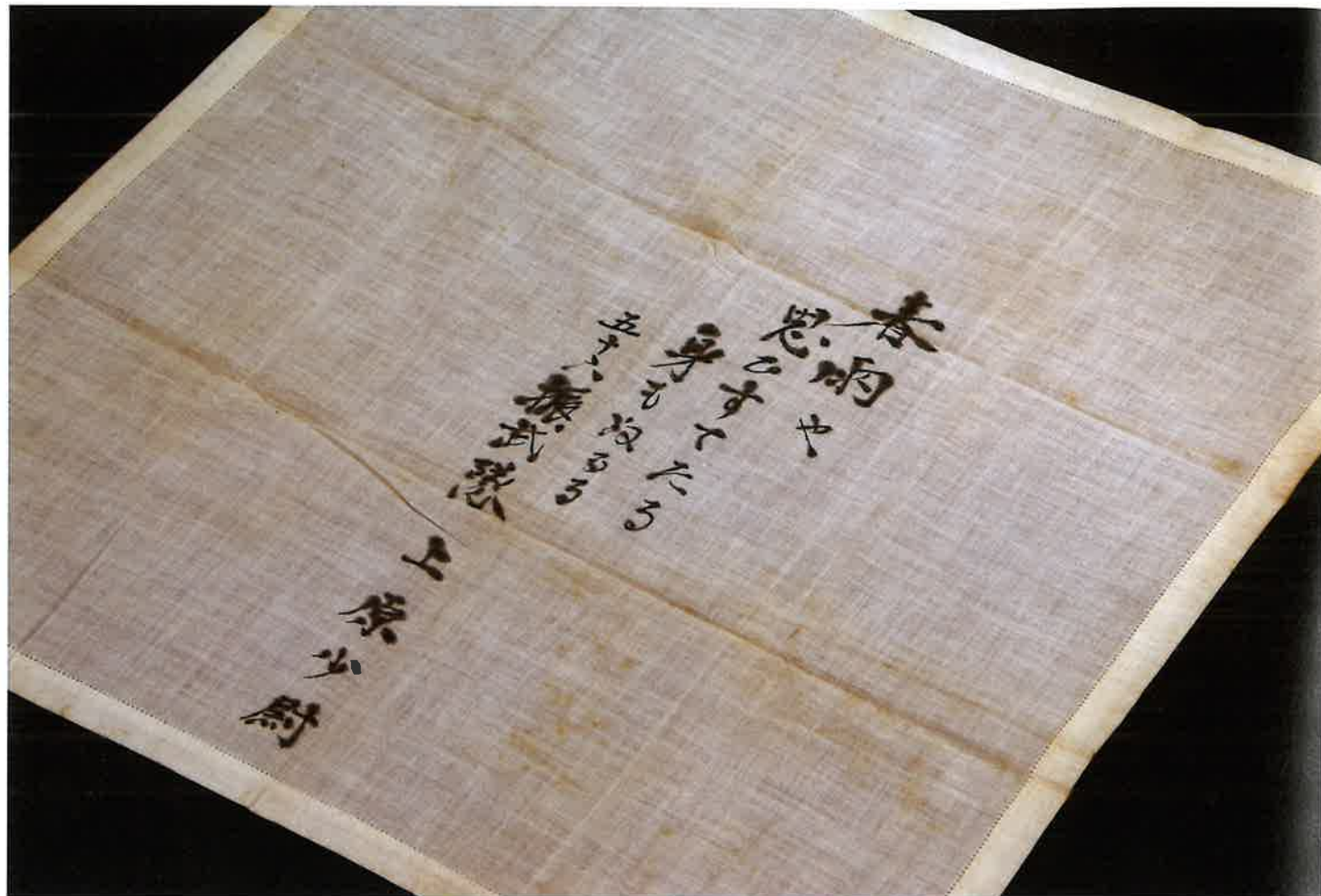
1945年5月11日午前9時頃

沖縄本島西北方面海域にて

敵艦隊に体当たり戦死

享年22

さらば永遠に。



良司がハンカチに書いた遺筆（知覧特攻平和会館）



良司が使っていた腕巻き方位磁針計（知覧特攻平和会館）



良司が着ていた軍服（上原家所蔵）



良司出征時に寄せ書きが書かれた日の丸国旗（上原家所蔵）

おわりに 「上原良司が遺した宝物」

私は写真を見ながら良司たち特攻隊員のことを考えると、条件反射のように目頭が熱くなり自然と涙が出てきてしまいます。

悲しみや怒り、はかなさの先にあるのはやはり時代の宿命であり、戦争・国家・社会に翻弄された若き青年たちの無念があるのではないのでしょうか。取材で上原家を訪ね、残された遺品や日記、写真を見ているうちにこれらが戦争中の貴重な記録であり、さらに不条理な運命に翻弄された若き青年の叫びであると考え、後世に遺すべき宝物だと思いました。この宝物を多くの皆さんに知ってもらいたいと思い、私なりに強い想いとメッセージを込めてこの『上原良司と特攻隊』に取り組みました。皆さまには上原良司という一人の特攻隊員の生き様から何かを感じ取って頂ければ、良司も喜ぶことでしょう。そして『良司が命を賭して遺した貴

重な宝物』を後世に語り継いでいけたら、私の人生をかけた一連の活動を良司は褒めてくれるかもしれません。

ひと言に「特攻」と言っても、特攻隊員一人ひとりの死があり人生があります。日本の戦争において特攻とは何なのかを考える機会になれば幸いです。上原良司という素晴らしい男に出会えたことを私は誇らしく思います。良司さんありがとう。最後になりましたが、上原家の皆様には、ご協力・ご支援を賜りました。また、亀岡敦子さんには良司と出会うきっかけを、その後も上原家との間を取り持っていただきました。

主要参考文献として中島博昭氏編著「あゝ祖国よ恋人よ」を使用させていただきました。

この場を借りて皆さまに厚く御礼申し上げます。

安島 太佳由

●プロフィール 安島 太佳由 (ヤスジマ タカヨシ)



1959年 福岡県生まれ
1981年 大阪芸術大学写真学科卒
1993年 安島写真事務所を設立
1994年 平成6年度文化庁芸術インターンシップ研修員
1995年 「日本の戦争」をテーマに戦跡取材活動開始
2002年 第8回平和・協同ジャーナリスト基金賞奨励賞受賞
2010年 『若い世代に語り継ぐ戦争の記憶』プロジェクトを開始
現在、東京都練馬区に在住

- 個展 「日本戦跡」「戦跡が語る本土決戦」「記憶のない戦争」「要塞列島」「闇に眠る小笠原」「太平洋戦争激戦の島々」など28回開催
- 写真集 『東京痕跡』『日本戦跡』『特攻漂流』『要塞列島』『消滅する戦跡』『平和を考える 戦争遺産図鑑』
- 著書 『日本の戦跡を見る』『訪ねて見よう日本の戦争遺産』『歩いて見た太平洋戦争激戦の島々』

協力 故上原清子、上原登志江、上原幸一、亀岡敦子
わだつみ記念館、知覧特攻平和会館（敬称略）
参考文献 『あゝ祖国よ恋人よ』上原良司・中島博昭
2022年5月1日発行 定価1000円（税込）
発行人 編著者 安島太佳由
発行所 安島写真事務所
東京都練馬区光が丘5-5-11005
携帯0900-10300-9827
ホームページ <http://www.yasujima-takayoshi.com/>
メール photo@yasujima-takayoshi.com

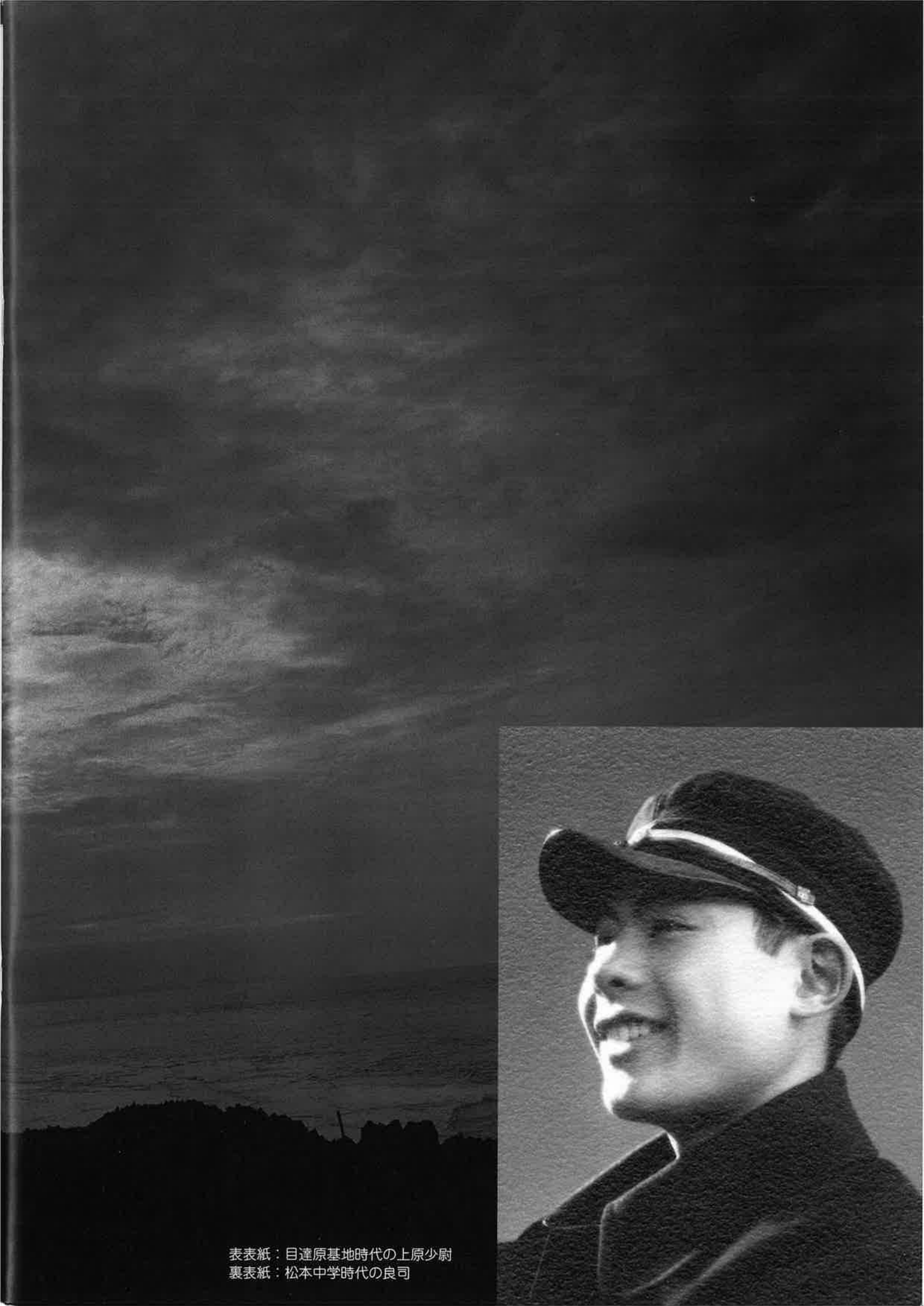
「上原良司と特攻隊 改訂版」



特攻隊員たちの遺影、中央に「上原良司大尉」の遺影（知覧特攻平和会館） ※特攻戦死により2階級特進で大尉に



特攻隊員たちの芳名碑、右から4番目に「上原良司」の名前（知覧特攻平和観音堂）



表表紙：目達原基地時代の上原少尉
裏表紙：松本中学時代の良司